

V. F. オドーエフスキーの活動初期における音楽思想

三浦領哉 (早稲田大学)

ロシアの作家、哲学者、音楽批評家であったウラジーミル・フョードロヴィチ・オドーエフスキー (1803-1869) は、前世紀以来イタリア音楽の強い影響下にあったこの時期のロシアに、文筆を通じてドイツ音楽を盛んに紹介した。現在では西洋音楽史上の金字塔とされる作品を数多く残した J.S.バッハ(1685-1750)や L.v.ベートーヴェン(1770-1827)の音楽をロシアに紹介したのも、また 1820 年代後半から勃興し M.I.グリムカ(1804-1857)や A.S.ダルゴムイシスキー(1813-1869)によって実践された、音楽における国民主義を評論の側面から強力に後押ししたのも、ロシア音楽史上におけるオドーエフスキーの大きな功績である。このようにロシア音楽史の歴史的展開を見る上で、この時代に彼が果たした役割は明白であるにもかかわらず、研究は作家としてのオドーエフスキーを対象としたものに限られている。ロシア音楽における国民主義については、ソ連時代、とりわけグリムカにその功績が帰せられ論じられてきた。そのグリムカについて論じられる際、オドーエフスキーの名はしばしば文献に登場するのに対し、グリムカの国民主義を文筆によって基礎づけたオドーエフスキーについて掘り下げて言及されることはほとんどなく、オドーエフスキーの音楽思想が正面から論じられた研究は皆無である。オドーエフスキーは 1820 年代のモスクワで、詩人 F.I.チュッチェフ(1803-1873)や D.V.ヴェネヴィーチノフ(1805-1827)らとともに哲学サークル「愛智会」を主宰していたが、彼らはドイツ観念論、とりわけ F.シェリング(1775-1854)の思想に傾倒し、これを普及させる目的をもって雑誌『ムネモシュネー』を刊行した。1825 年のデカブリストの乱により、愛智会は弾圧を恐れて解散したが、そのリーダーであったオドーエフスキーはペテルブルクに移り、音楽評論活動と音楽思想の分野における著作活動を続けた。この時期のオドーエフスキーの音楽に関する論文や著作は、確固とした思想史的・美学的知識に裏付けられた言説としてはロシアにおいて最初のものであった。すなわち、ロシアにおける音楽思想史を考える上で、オドーエフスキーこそがまさにその出発点となる。本発表ではオドーエフスキーが音楽評論を開始した 1822 年から、それが明確に国民主義音楽(国民楽派)を志向するようになる 1835 年までを彼の活動における「初期」と位置づけ、この時期における彼の音楽思想をドイツ観念論、とりわけシェリングの芸術哲学とヘーゲルの美学とのかかわりを中心に考察し、ロシアにおける音楽思想の出発点を示す。